

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	太極圖説概論：論説
Author(s)	乗杉，嘉壽；周，敦頤
Citation	龍南會雜誌， 1 3 0： 1 - 2 7
Issue date	1909-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5716
Right	

龍南會雜誌第百三十號

論說

太極圖說概論

哲學科三年 乘 杉 嘉 壽

一、支那哲學の通觀

夫れ仰て天を眺むれば幾多の星辰日月其光燦爛として輝き俯して地を觀れば幾多の有生無生煤々として存し蠢爾として動く人此間に生を稟け是等の森羅萬象と萬象の變化推移に接觸交渉す茲に於てか彼等は此の宇宙の大と萬象の變とに對して夙に怪訝の念を起し畏恐の感を抱きさては依憑の情を發するに至る即ち是れ哲學的思想の淵源する所にて又宗教的感情の發露せる動機たり然り而して元より其民族特有の性情と彼等の國土氣候の天然的狀態とは此の二現象に自ら厚薄長短を生し或は其一を有して他を有せざるものありと雖之を古今東西の歴史に按するに如何なる民族も其の宇宙人世に對する彼等の干係は此哲學及宗教の思想感情の形式に依て現れざるはなし乃ち彼の泰西希臘の民族は夙に哲學的思想を喚發し得たりと雖も伯來民族の如き猶太民族の如く宗教的なるを得たりしな

り又之を東洋に見んか支那に於ては孔老諸子の哲學存せしと雖とも尙印度民族の如く宗教的民族たるを得ざりき而して今其宗教的方面に關することは暫く措て問はずは今支那哲學の思想發展の順序を詳に察せんに其初めに多く具體的にして客觀的の觀察より始まり次第に主觀的抽象的の考察に入れるを見る換言すれば客觀的具體的説明より次第に主觀的抽象的論究に移りゆくは總ての思想界に於ける發展の大勢にして之を支配する法則なりと云ふも敢て不可なし然りと雖ともかゝる二様の思想考察とその研究法とは常に展轉して用ゐられ又並用せらるれば主觀的哲學の後にも亦客觀的哲學なしとせずされど其思想は粗より密に近より遠に淺より深に入るは明了なる事實にして今日の客觀的の哲學思想は必しも昔日の客觀的哲學思想と全しからざるなり必ずやある進歩を有するなりされば今之を支那哲學の思想界に見るも全一の原則に依れるを見る即ち一括して儒教と云ふも之を詳に見るときは其思想の進歩と其研究法の變化は彼等の外形に於ても内容に於ても霄壤の差を生ずるに至れり乃ち孔子以前に於ける儒教は之れ一ケの哲學と云はんよりも一ケの普通教育、實際的教化にして周禮の所謂「儒以六藝教人」にして専ら國民に對して人倫の大道を實行せしめ殖産稼穡のことを修めしむるに止れり乃ち之れ一ケの教化にして學問にあらず之れ一ケの實行主義にして空理想にあらず大にしては天下國家を治め小にしては一身一家を修むるの道に名けたるものにして堯舜之を創作し禹湯文武周公之を承け以て孔子に至りたるものなりされば孔子は此の相傳の修身齊家治國平天下の活道を實地に行ふて以て民人社稷を安せんとするに力めたりしも然とも彼れが境遇と當時の大勢とは遂に儒道本來の意義を發揮しその實現を完全にするに至らしめざりき茲に漸く道は變

して教となり教は變して學となり術は變して空理となれり乃ち孔子が晩年の古典遺文の刪添祖述は其實行社會より分離して漸く政治と修身の二途となれり學術實行兩ながら相分れて儒教は益純粹なる學術の形を取り以て社會の實務と逕庭を生ずる漸く著しくなるに至る乃ち子思の中庸に於ける人性鬼神の論議の如き孟子の性善養氣盡心の倫理説に於けるが如きその先哲前賢の意を去る漸く遠くなれり而して漢唐訓詁の學を経て宋に至るに及んで儒教は純乎たる哲學にしてその論ずる所宇宙の大にあらすば人心の精微にして儒教の實行的方面は専ら學術的研究に依て覆はれ全く理論的研鑽とはなれりかゝる歴史を有する儒教の變化は是亦止むを得ざることにして自然且つ至當のことなりと信す何となれば儒教は元と修身齊家治國平天下の教なればその對象とせる社會國家民人の變態とをの時代々々の思潮趨勢の進化發展に對して沒交渉沒關係なるを得んやされどその初めに於て具體的觀察や客觀的考察や歸納的研究を以て足れりとなし、儒教も時代の大勢と思潮の趨勢に依て一大變動を來たし漸く抽象的主觀的の考察に入り演繹的研究法を取るの止むを得ざるに至れるを見る之れ豈に退化と云ふべけんや異端と云ふべけんや苟くも儒教がその初め單一なる現實的道德なるにもせよ一ケの思想として存せし以上かゝる變化を受くるは理の當然にして自然の進化發展の歷程を経來れるものと信するなりされば宋代思想の發展が之れ儒佛道三教の混合にせよ一ケの井然たる系統を有する一大儒教の進化せるものとて吾人が取扱ふに何の不可か之れあらん之れ一は思想の自由を認むる所以にして且つ思想發展の歷程として必然的のものなればなり況んや宋儒爲學の根本主義も亦儒教の根本精神とも云ふべき修身齊家治國平天下にして之れ彼等が最終にして最初の理想にして

又實にその研究の根本なりしに於てたやされば此の至當にして必然なる思想發展の歷程を経たる儒學は恐らくは學としては宋に於て其絶頂に達せりと云へしかくして明終清朝に於ては時運展轉又漢唐訓詁の學に近き考證學とはなれり之れ全く思想界に於ける循環法とも云ふべきものにしてかの獨逸のカント氏以後に於ける泰西思想界と全一規轍を蹈むものと云ふへし今宏く支那哲學として之を概觀すれば孔老を始めとして莊列孟管荀墨韓非各創見を立て、思想群起し燦然として炯爛の美を呈せし周末春秋の時代は古代希臘のソクラテスプラトールアリストートルの時代に比すべくその一旦秦の焚書の蠻行に依て漢唐訓詁の學となるに及ては一の新進なる思想發展の見るべきもの存せざりしは恰も彼れが中世に於ける桃花源洞の睡りに耽りて只管に古學を紹述して耶教の教權の配下に宣動せしに全しされとデカルト　ペーコン　ヒューム出て、漸く宇宙原理の大觀よりも人性自我の研究に依て漸く哲學的新思想の萌芽を生し以てカント　ヘーゲル　シヨペンハウエルの大哲相次て出たるは恰も周子及宋代思想の前驅者たる陸淳。趙匡。孫明復。陳圖南に依て漸く支那哲學に於て一大變動を與へて以て宋代思想の炯爛を呈せるに全しされば周子以後宋代の哲學は全く支那古代の思想の如く直ちに具体的現實的宇宙觀より出發して以て諸般の人事を歸納するを専らとせず又一方に於て彼れが知的探究を逞ふして演繹的に且つ抽象的に人世道德の根本原理を求めんとせりされば全しく儒學の目を有すと雖も自ら彼我相違せるものゝ存するあるは至當にして必然のことなり然りと云へども彼等も亦之れ支那哲學てふ一大系統中に發露せる思想なれば自らその根本に於て其の主義に於て合一する所あるなり何をや乃ち世界の根本原理は之れ自然法にして自然法は乃ち之れ道德法とな

寂然不動者誠也 (聖第四)

無思本也 (思第五) 誠無爲 (誠幾德第三) 故誠則無事矣 (誠下第三) と云ひ又氣(用)としての誠を説て曰く

無思本也思通用也幾動於彼動於此無思而無不通爲聖人 (思第九)

感而遂通者神也動而未形有無之間者幾也 (聖第四)

發微不可見充周不可窮之謂神 (誠幾德第三)

以上は周子の本体論にして實に人生の至極之れ誠にして之を理に即して云はく無爲無思にして至善純粹なりと云へとも一旦幾動て善惡生し賢愚分るされば吾人は此の本然の性に還原し至善に到着するは人世道義の根本なりと云ふへしと之れ彼れが道義論の基礎と云ふ可し

夫れかゝる人性の未だ外物に觸れず他の交渉なきときは水上波なきが如く湛然として動くをなし而して至善無垢純粹なりと云へともその已に發して事に處し物に觸るゝに當りてや善惡邪正の屬性交々發し來るを免れず故に君子の意を此の發動の際に注きて心を幾發の微に致して戒愼怠らざるなり

君子愼動 (愼動第五)

又曰く

誠無爲幾善惡性焉安之之謂後焉執焉之謂賢發微不可見充周不可究之謂神

然らば吾人は如何にして其本然の性を全ふすべきか他なし恬淡虛無無欲にして外事外物の誘惑を拒絶し常に心を靜に安するにあり

聖人完人中正仁義而主靜立人極焉 (太極圖說)

聖可學乎曰可曰有要乎曰有請問焉曰一爲要一者無欲也無欲則靜虛動直靜虛則明明則通動直則公則傳明通公傳庶乎 (聖第二十)

されば彼れが無欲と云ひ主靜と云ひ儒教本來の修徳の工夫と大にその形式を異にせるありと云へども之れその出發せる本体論の結果として顯はれ來れるものにしてその形式を異にせるは全く時代精神と要求と思想界の大勢に順應せるものにして又以てその根本義とするは人君子の域に達し天地の大化に合一すべきある偉大なる精神見地を獲得して徳化を四海に布かんと力むる實行的倫理主義ありしことは明了の事實なりとす吾人亦之を以て儒教の進歩せるものと云ふを敢て憚らざるなり

第三章 太極圖及太極圖說

一(イ)其由來一(ロ)其内容

(イ)太極圖及太極圖說の由來に付て

夫れ周子の太極圖及圖說の由來に關しては古來諸說紛々たれども陳希夷等の神仙家の所說を見るときはたとひ太極圖として彼等の間に傳へさるも其の萌芽とも見るべきものゝ存せしを認むるなり故に公平に且つ歴史的に之を云ふときは朱子が太極圖を以て周子の創作にかゝり周子の新說と主張せしは周子の學を重するの餘り且つ神道家の傳說的怪誕の煩累を避けんが爲めにあらざるなきやを疑ふものなりされば宋の朱震の云へる語に

陳搏は先天圖を以て神放に傳へ放は穆修に傳へ修は李之才に傳へ之才は邵雍に傳ふ修は太極圖

を以て周惇頤に傳ふ周子顯程頤に傳ふ（漢上易傳表文）

又象山以上の朱子發（名は震）の云ふ所を取りて曰く

朱子發謂濂溪得太極圖於穆伯長伯長之傳於陳希夷其必有致希夷之學老子之學也無極二字出

於老子知雄章吾聖人之書所無有也（象山文集卷二、二十二右）

然るに朱子は斷然此の種の説を否定し

今人多疑濂溪之學出於希某曰濂溪書具存如太極圖希夷如何此有説

と云ひ太極圖は全く周子以前未だ曾て有あらざりしものとせりされど予は寧ろ周子を以て從來仙家の傳へたりし該圖を以て自家藥籠中のものとなせるならんと信す今清朝の考証家朱彝尊の經義考に依るに曰く

按するに周子の易は通書是れなり夫の太極一圖の如きは遠く道書に本つく圖南陳子從つて之を演へて圖を爲るもの四位五行なり其中は下よりして上る初一を玄牝之門と云ひ次二を練精化氣練氣化神と云ひ次三は五行定位にして五氣乾元と云ひ次四は陰陽配合にして取坎填離と云ひ最上を練神還虛復歸無極と云ふ故に之を無極圖と云ふ乃ち方士修練の術のみ當時曾て華山の石壁に刊せり相傳ふ圖南は之を呂崑にうけ崑は之を鐘離權にうけ權はその説を魏伯陽より得伯陽は其旨を河上公に聞けり同家に在りては未だ嘗て詡ねく不傳の秘となさるなり周子とりて之を轉易し亦圖を作るもの四位五行なり其中は上よりして下る最上を無極而太極と云ひ次二は陰陽配合にして陽動陰靜と云ひ次三は五行定位にして五行各一其性と云ひ次四を乾道成男坤道成女

と云ひ最下を化生萬物と云ふ更めて之を太極圖と云ふ云々

此他我國に於ては貝原益軒の大疑錄には明季の王嗣槐が考証を記し又郝景山時習新智の語を引用して周子の創作たるを疑へり又太田元貞はその疑問錄に於て國史周茂叔傳、陸子の書簡を挙げ又大宗師の撓挑無極、刻意の澹然無極、在宥の游無極之野、列子湯問の無則無極有則有盡等の無極の二字は皆老聃莊列の家言にして周子が陳希夷より傳ひて此の語ありと論斷し且つかれば朱子發胡仁仲の通書の序晁景迂の讀書志の説を引き滔々數千百言朱子を駁して餘す所なし最後にかれ論して曰く

自漢以來諸儒易を云ふもの太極圖に及ふものなし道學には有之上方太洞真之妙經に太極三五之説を著せり唐の開元中明皇御製の序あり東蜀の衛琪の註せし玉清無極洞仙經に無極太極諸圖あり中畧朱彝尊の經義考曝春亭集の二書に詳なりされば周子此圖を穆伯張に受けられしこと明なり異端の學故に二程受け給はぬにや又うけられしも不正のことゆへ人間に傳へられざるにや二程全書一語も此の書に及はざること此にて明亮なり南宗偏安華山に此圖あることを朱子は知り玉はず故に儒家千古不傳之秘と標榜せられしは大なる陋ならずや云々

予今私かに案するに周子の太極圖は道家より由來せりとの説は或は以上諸氏の説の如くならんされど予は敢て云はんと欲す周子が道家の圖を參考して以て儒家本來の思想をより深く合理的に表明するの具となせしことを夫れ古今の諸有完全なる學說學案の一朝突如として世に出づるものはあらず皆ある年月とある進化の歷程を経て到達せるものにして自らその次第順序を有し師資相傳の歴史を有するものされば周子の太極圖及太極圖説も道家の無極圖に參酌する所或は多かりしならんも必し

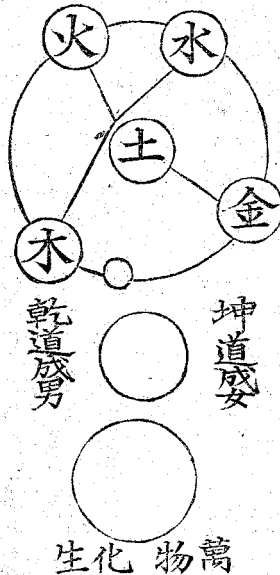
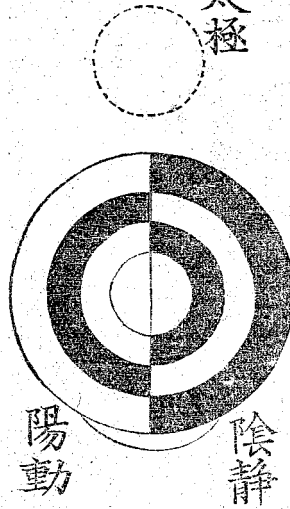
も之を以てかれと全一なりとなすはあまりに酷論たるに過く之れ却て他の思想を大に咀嚼して自家思想の發展に資しその營養物となせるものと云ふも敢て不可なきかされば予は之れが道家より傳へられたるものとするも直ちに之を以て周子の圖説を難せんとするの不可にして寧ろ大に其の偉大の手腕を稱せすんばあらず何となれば彼れが太極圖説に於て述ふる所は之れ道德にあらず又佛教にあらず却て儒教本來の所説をその新き思想と方法に依て表明せるものなればなり乃ち太極圖説は最も巧みに支那古來の宇宙萬物生々の原理を説き之れより出發して人倫の大道原理を演繹せるものなればなり只た其の研究の方法と説明の形式を顛倒せるまてのことにてその横に一貫せる儒教本來の根本主義を未だ逸せざるものなりと信すもし儒教にして宇宙に於ける思想の進歩人間思想の要求に應ずるを拒むべくば之を異端とし之を邪説とせんも己に孔孟以下の儒教の歴史は到底此の要求を拒絶し得ざる境遇に存し事情を有するに於てたや況や今日思想發達の隆盛時に際して尙堯舜儒道の本義を云々して之を以て儒教以外として擯斥することは其當を得たるものにあらずと信す然りと云へとも予は尙かの朱晦庵張南軒等の如く全然太極圖及太極圖説を以て直ちに周子の創説として全く道家佛氏の之れに關すべきものにあらずとし以て儒家本來のもの夫れ自らなりと云ふにあらず之を歴史的批評的態度に依て公平に究明してその道家より來れるを信すると今時に又その内容に於ても直ちに全く儒教立教の當初のものとなさすと雖とも尙之を以て周子が儒教の根本主義をその新き思想と方法に依て表明せる結果にして明に儒教哲學の進歩發展の一段階として之に資することの偉大なるものありしを嘆稱せすんばあらずそれ創造や模倣とは只た之れ外面上の形式のみその内容の思

想に於ては又た撰ぶべきなし況や周子は徒に他學の思想を繼襲せるものにあらず全然その内容を變しその想案を轉易して大に儒家の根本主義の説明に資するもの大なりしに於てたや

(ロ) 太極圖及太極圖說の内容の瞥見

——其純性哲學——倫理學

太極圖



此圖を説明するもの之を太極圖說となす乃ち曰く

無極而太極太極動而生陽、動極而靜靜而生陰靜極復動一動一靜互爲其根分陰分陽兩儀立焉五行一陰陽也陰陽一太極也太極本無極也五行之生各一其性無極之真二五之精妙合而凝乾道成男坤道成女二氣交感化生万物万物生々而變化無究焉人也得其秀而最靈既生矣神發知知五性感動而善惡分万事出矣聖人定人以中正仁義而主靜立人極焉故聖人天地合其德日月合其明四時合其序鬼神合其吉凶君子修之吉小人悖之凶故曰立天之道曰陰與陽立地之道曰柔與剛立人之極曰仁與義又曰原始終故知死生之說大哉易斯其至矣

之れ塵々二百二十有八字の小論に過ぎずと雖ども后代思想界に與ひし影響や實に偉大なるものにして乃ち之れ實に伊洛關閩の源流となるものにして宋代哲學の隆盛は實に此小論に淵源するや大なりと云ふも敢て不可なからんか今予は此の圖說の内容を詳に吟味し之を詳細に論せんと欲すれば恐らく支那に於ける儒學成立の根元より其發達の系路を逕り以て宋代哲學の全般に渡りて論せざるべからず之れ此小論文に於て予の能くする所にあらず故に只茲にその大要を摘みて記さんとす乃ち周子以爲らく元來天地に先ちて絕對にして自存せる者あり觀るべがらず聞くべからず觸るべがらず然れども秩然たる條理の其内に包含せらるゝあり故に之を稱して太極と云ふ而して二種の活動力ありて之に附屬す曰く動曰く靜太極之に依て以て陰陽の二氣を生ず二氣分れて木火土金水の五行となる是故に五行陰陽太極は本是一体たり五行の精粹集合して人類を生ず人類は五行に依て以て仁義禮智信の五性を得るが故に万物の靈たるを得るなり然れども其五性を動かして外物に應するに當りて其行爲に善惡の區別を生ずるに至る之を律して以て正きに復歸せしめんが爲めに聖人中正仁義の道を立て靜を主とすることを教ふ何となれば靜にして外に觸れざるときは其五性中に全くして惡に陷らざればなり苟も此の道に入るときは天地と一体となることを得と云ふにあり而して后來洛學の現象世界の本体に關するの説は無極而太極より來り天地人及万物の開展せる所以の説は一動一靜一陰一陽より來り人性に氣質本然二種あるの説は五性感動而善惡分萬事出矣より來り敬を以て修身の第一義となすの説は聖人定人以中正仁義而主靜より來る今少しく之を批評的に驗せんか無極而太極以下變化無究焉に至る一百三字は純性哲學の本体論に屬するものにしてその無極而太極及陰陽一太極也太

極本無極と云ふ原理は抽象の一元論にあらずして具体的一元論を示すなり何となれば宇宙萬象の本体たる無極は直ちに又具体的本体なる太極にして太極の外又無極あらず而して太極元と無極なりとすればなり且つその太極の二氣陰陽を内に包含するを云ふもの之れその内含的の二元論なるを示すものなり乃ち周子の無極や決して抽象的虛無のものにあらず其内自ら万化の根源たる陰陽二氣を内含保存せる具体的原理なりされば無極の二字を以て直ちに抽象虛無と誤認し老莊的思想に外ならずと速断するは尙哲學的説明としても其不合理なりと信す乃ち周子の無極而太極その太極が陰陽となりて發現すと説く所の此の無極なるものは太極の理として乃ち吾人の思想上より見たる所のものにして陰陽なるものは無極の氣として乃ち眼前の現實として發表せるものにあらずや然り而して既に陰陽の二氣相互に推移消長す其配合の度合如何に依て五行を成し以て萬化を遂げ萬有を現す之れ實に純粹理性としての宇宙本体の説明にして泰西近代に於ける進歩せる哲學思想に於ても到底之れ以上の説明を宇宙の本体に對して與ひ得ざるなり而して五行一陰陽也陰陽一太極也太極本無極也五行之生也各一其性々と云ふに至りては現象即實在の論議にして吾人の眼前に存する萬象又その本体そのものにして豈に無極太極を以て五行陰陽以外に存するものとせんやよしをか存するとしても吾人は到底かゝる意義の無極や太極を達觀洞察し得ざるなり且つかれが人也得其秀而最靈云々大哉易斯至矣と云へるを見ても彼の本体論の現象即實在論なること明なりされば吾人の悟達の法亦吾人の心性の本源に之を求めよ然り何となれば吾人も亦之れ一ヶ現象なればなり乃ち之れ彼れが太極の説を人心に於て證せんとせるなり然り而して聖人定人以中正仁義以下は彼れが倫理の大綱にして以上の太

極の原理より必然的に來れるものを明にし聖人の性天地日月の德乃ち無極と合なるを示し終りに臨て此の道理を明示せる易の至偉にして至高なるを稱せりされば彼れも亦儒家立教の宗とせる易の原理たる生々の根本主義の上に巧妙なる哲學的説明を與ひ能く其時代思潮に應じ時代思想の要求に應じて以て其儒教終極の目的なる修身濟家治國平天下の要求に應すべき倫理道德の原則を演繹せるものと云ふ可し乃ちかれが倫理の主眼とは何ぞや本來の誠之れなり未發之中之れなり何となれば善惡邪正の分は之れ五性感動に依り而して本來の誠未發之中之れ善惡を超越せるものなければなりされば吾人の常に心を用ふべきは發動の際にして常に修練のなすべきは主靜にして無欲なるにあり而して吾人は無欲と云ふを以て直に絶欲と全義となすの不可なるを信するなり何となれば人生を有して無欲なるをうれども尙絶欲するを得ず何となれば彼れ等の所謂無欲は絶欲と全義なればなりされば吾人の無欲とは吾人の生命を支ふるに足るべき範圍内に於て云ふ而已豈に絶欲と全義ならんやされば吾人はかゝる眇たる太極圖說なりと雖ども能く一の体系を有する哲學の整然として存し煥然として具はるを見る之れ宋代思想灼爛の泉源となり又實に支那思想界の一新時期を劃せしも又宜なる哉

第四章 太極圖說と易

緒言―朱陸二氏の争―易の内容と太極圖說

夫れ太極圖說その出所の如何に關らずその説く所は又儒家立教の根本精神なるや論なきのみされど已に述たる如く太極圖說は儒教思想が長き年所を経て思想の變遷境遇の替違に依て多くの變化と進歩を経たる後に出て來れるものかれは自ら其敘述の体裁と思想の運用とを異にするは必然の結果に

して之を泰西哲學史上の思想系路を逕り見るも此の種の現象は明に存することなりされば予は此太極圖說そのものに對しては充分の全情と多大の尊敬を以てその儒教思想に一大發展を與へたるものとして寧ろ儒教思想が茲に一大進歩をなせるものとして之を研究せんと欲すればとて予は直に朱子一派が之れになしたる註解辨疏を以て眞なりとなし太極圖說そのものを以て儒學立教の最初に於ける精神そのものとは云はす實に之れは之れ一大儒教の思想界中の一波瀾にして寧ろ進歩せる儒教として大に歡迎せんと欲すされば古儒者の之を排して異端となし異教となすは敢て彼等が偏狹固陋なるを憐れまずんばあらず然りと雖も予が今茲に直ちに太極圖說を以て儒教の根本精神の發達せるものとなし又開展せる儒教思想と速斷し去らんこと却て淺薄の見にして思想系統の何たるを知らざるものとして識者の笑を買はんこと我が本意にあらず少くとも以上の斷定をしてその眞なるを證せんには果して太極圖說の云ふ所は儒教の立教の精神なりや今一層詳細に論するを至當とするなりされば所題の如く太極圖說と易との比較研究を試みて少しくその斷定の正否を確めんと欲す何となれば圖說は乃ち之れ儒家立教の根本たる易の根本精神を捕ひてその時代思想と時代用語に依て書かれたるものなればなり實に此の問題や之れ引ては宗儒哲學と儒學そのものとの交渉問題にして頗る重大なる問題なり豈に能く我小論文の能くする所にあらずされば古來數多の碩學巨儒の喧々囂々此の問題に對して論述せる所と易に對する見解を並記して之等を一括して聊か批評を加ひ然る後予が私見を論述せんと欲す博士乞ふその迂なるを笑ふ勿れ

陸象山以爲らく易有太極とは之れ聖人の云へる所今何を苦て無極而太極と云はんや今更に無と云は、之れその裏を云ふものにして遂に太極をして萬化の根本となすに足らざるに至らしめんと

象山與晦庵書

尊兄向與梭山書云不言無極則太極同於一物不足爲萬化根本夫太極者實有是理聖人從而發明之耳非以空言立論使後人簸弄於頰舌紙筆之間也其爲萬化根本固自素定其足不足能不能豈以人言不言之卽易太傳曰易有太極聖人言有今乃言無何也作太傳時不言無極太極何嘗同於一物而不足爲萬化根本耶中略太極固自若也(象山全集)

又象以爲らく易に一陰一陽之謂道と云ふあり故に一陰一陽は之れ己に形而上のものなり況や太極に於てやその形而上なること明なり之を強て無極の二字を冠するの要なしと乃ち曰く

(象山與晦庵書)後書又謂無極即是有理周先生恐學者錯認太極則爲一物故無極二字以明之易之太傳曰形而上者謂之道又曰一陰一陽之謂道一陰一陽己是形而上者况太極乎曉文義者舉知自有太傳至今年未聞錯認太極別爲一物者說有愚謬至此矣豈不能以三隅反何足煩老先生特他於太極上加無極二字以曉乎

且つ象山は太極圖說の出所に對して論せることは已に上述せり而して象山以爲らく極は中の義なりもし無極と云は、無中と云ふが如し中は之れ天下の大本民人此の中の理を得て生る今中なしと云ふ是れ沒眞理にあらずして何ぞや乃象山曰く

且極字亦不可形字釋之蓋極者中也言無極則是猶言無中也是矣可哉若懼學者泥於形器而申釋之則

且如詩言上天載於下贊之無聲無臭可也豈無極字加於太極之上

又曰く

極亦此理中亦此理也五居九疇之中而曰皇極豈非以其中而命之乎民受天地之中以生而詩言立我蒸民莫匪爾極豈非以其中而命之乎中庸曰中也者天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉此理至矣外此豈更復太極哉

又曰く

以極爲中則爲不明理極爲形乃爲理乎中畧充塞宇宙無非此理以字義抱哉

以上は陸氏が朱子と往復せる書簡中に於て彼れが周子の無極に對する異見にして主として朱子の所に對して論難せるものなり予は今陸氏所論の正否如何は暫く措て之を問はす直ちに朱子は如何に之れに對して答へしやを見んと欲す夫れ朱子以爲らく易に無極と云はさるも周子之を云ふ何の不可か之れあらん元來易中已に太極の語なし孔子初めて之を用ふ今茂叔に到て無極と云ふ只たその理の存する所を發明して云へるのみ何のさまたげか之れあらん況や有太極と云へども無太極と云はす之れ太極を一層明了に詳細に説明せんと欲して敢て無極と云へるのみ易に有太極とあれども尙無極と云ふべきを正當とす之れ見易きことにして別に論すべきまでのことにあらずと乃ち朱子曰く

伏羲作易自一畫以下文王演易自乾元以下皆未嘗言太極而孔子言之孔子贊易自太極以下未嘗無極也而周子言之夫先聖后聖豈不同條而其貫哉

朱子は更に其無極を添へざるべからざる所以と又太極の有と周子の無と敢て撞着するにあらざる所

以を述て曰く

故語道體之至極則謂之太極語太極之流行則謂之道雖有二名初無兩體周子所以謂之無極正以其無方所無形狀以爲在無物之前而未嘗不立於有形之后以爲陰陽之外而未嘗不行乎陰陽之中以爲通貫全體無乎不在則又初無聲臭影響之可言也（文集三十六答陸子靜書）

又曰く

無極而極太猶曰莫之爲而爲之莫之致而至又如無爲之爲皆語勢之當然非別一有一物也（全上）乃ち朱子は以て老子の無極茂叔の無極とは之を一とすべからず老子の無極は無窮の義茂叔の無極は之れ形色なく方所なき前に已にその理を包含するものにして且つ物ある后と云へとも尙ほ絶ざるものなりされば之を直ちに老莊と全しく空々寂々のものとするべきにあらず乃ち道の初源は聲もなく香もなしされば之を無極とは云ふなり朱子又た陸象山の極を以て中と釋せるの不可なるを論して曰く

諸儒雖有解爲中者蓋以此物之極在此物之中非指極字而訓之中也極者至極而已

以上朱陸二氏の所論に依て直ちに周子自らの無極而太極の説が聖學の遺意なりや否やを斷定するはその尙早なるを覺ゆ何となれば今かりに象山に従て之を以て直ちに老莊の所説にして儒教に云ふべきにあらずとするは又今日吾人の立脚地より乃ち公平なる哲學的觀察に依りては到底云ひ得ざることなり何となれば朱子の云ひけん如く孔子が一旦太極の語を發明してより茲に周子出てゝ無極の二字を加ひて太極そのものゝ哲學的意義を論理的に理學的に學問的に説明し發展せしめたるものと見るに何の不可か之れあらん然りと雖ども今又直ちに朱子に賛してその周子の無極而太極は之れ全

く理氣の二元論に外ならずとし以て儒學の根本たる易そのものゝ意に外ならずと云ふは自ら儒學立教の根本旨義たる實行主義を云る漸く遠く倫理的政治的審美的の原理を捕捉するを得ざる共周子自らの本意を失ふべきにあらざるか之を要するに朱陸の論争は實に獨り宋代文集の秀逸たるのみにあらず又實に支那哲學の精華と云ふも敢て不可なし而して兩者はその學風と研究法の差を以て遂にその思想上に大逕底を生するに至れるもの殊に此の太極に付ての見界の相違は兩者思想の相違を代表するものと云ふも敢て不可なし乃ち朱は極とは之れ至極の義なりと陸は極とは之れ中の義又理の義也と之れ兩者がその出發點に於て已に東西黑白の別を榜標しつゝありしなりされば朱の太極は専ら論理的第一義にして陸の太極は倫理的第一義なり朱は飽くまで知的にして陸は意的なりなり吾人は此の兩者の一を取りて直ちに周子の無極而太極を説明せんことの餘りに偏するなきやを疑ふあり何となれば吾人もし思想進化の理法と思想の自由に與みして周子を承認し且つ陸氏の如く無極の二字を解するに偏するあくば確かに周子の無極而太極は易の所説と意義とを一層哲學化せるものとして見るを得へくされど無極而太極の説を以て儒學立教の初源に溯りて易の所謂太極道陰陽形而上形而下等の意義そのものと全く合一すべきものかりと云ひ得ざるは又明了なりとす只た周子の所説を全体とく寛大に公平に一般の哲學的見地より解すれば一儒教思想の發展と云ふも敢て不可なく然りと雖とも今予が此の斷定を確むる前に當り須く易の何たるやを見る又無用の業にあらず

易の内容大觀

夫れ易は支那に於ける哲學的觀察の最も古きものにして上下四千年の間支那哲學者の考察思惟せる

所亦此の範圍の外に出るものあらざりしと云ふも敢て不可ならんか其理多岐にして且つ玄妙一軌にして之を究むべからずと雖ども今暫くその組織を概論せんか乃ち易は乾坤陰陽の二儀をその思想の起點として演繹したる二元的思辨と云ふも不可あし

天地之大德曰生(文言傳)生々之謂易(同上)易有太極是生兩儀兩儀生四象四象生八卦八卦生吉凶
吉凶生大業

而して此の思惟の根本は一方に於ては天地生々の理乃ち自然現象を見ると全時に他方には人類生殖の作用を觀て之を結合し且つ之を對比類推して抽象的に八卦の數を假りて之を述べたるものと云ふ可しされば易は常に此の陰陽の消長盈虛と云ふ二元の對待と流行の原理を以て普遍の原則となし之を人事に應用して人常に盈つれば欠くべく謙あれば憂をがるべしと教ふるにあり之れ乃ち生々の原理より演繹せる儒教の倫理的實行主義の依て出づる根本原理なり

天道虧盈而益謙 (易象上傳)

されはその昔黃帝伏羲に依て作られたるものは勿論堯舜夏禹の世に於て用ゐられしものは専ら哲學的思辨的のものと云ふよりも實行的實地的のものにして吾人の目前に顯はれたる宇宙萬象を基礎としてその實行主義の根本原理として只た外界宇宙の自然界の現象觀察に止めてかの深き哲學上の巧妙ある思想の運用に依て組織せられたる后世の本体論及び道義論の如き明了なる區別を立て論述せるものにあらざり乃ちその根本原理として宇宙生々の原則を立て陰陽消張の眞理を發揮し之れより演繹して人間行動の本義を説明せんとせるにありされば下庶民は上聖人君子に習ひ聖人君子は天

地生々の理乃ち偉大なる仁愛の原理に須ふと云ふにあり之れ實に支那思想の根本にして孔子以前に於ける支那治國の王道なりしなりされば今此の實地的根本主義を以て哲學的説明に替ひ論理的思辨を加ひて一ケの純然たる思想系統とあし一ケの理論として之を觀るは大に其間に逕庭の存するは必然の結果なり夫れかゝる易は孔子に依て已に既にそれ自らの有せる支那古來の單純なる思想原理に對してある思辨的説明を與へられ又ある哲學的意義を加られ以てある体系的組織が與へられたり子思孟子に至りてや益々甚たし之れ畢竟時代の趨勢と思想の潮流に依て來れる結果にして又如何ともすべきかしされば古代の易はいざ知らず吾人が現代の思想を以て今日傳ふる周易を詳に觀察するときは明に又一ケの哲學的思想の整然として具はり哲學的組織の秩然として存するを見るへし而して此の周易一度成りてより以后儒教中かゝる哲學的組織の書出でざりしが殆ど千五百年を経て周子出て之を祖述し自ら其時代の思想と大勢に應じて大に易の哲學的組織をして益深遠ならしむるに至れり然らば宋代儒學の當時は之れ儒教が其最初に復歸したるものと云ふ可し今之を上代に比較せんか周子の后宋學中諸説の勃興は詩書易春秋既になりて老莊申韓等の出てたる時と相對し宋學以后清に至りて考證學の起りたるは漢唐訓詁の學の戰國后に生したるに似たり蓋し同一の傾向を有する事實の循環亦奇なりと云ふ可し予は已に易の内容に對して瞥見をなせり以下宋代以后に於ける彼我に於ける碩學巨儒の易及太極圖說に對する異見を列ねて以て予が結論を求めんとす

第六章 結 論

蓋し周濂敬一度出て、宋學隆盛の端緒を開き數十百年變化多からざりし儒教思想上に一大變動を與

へしことは明瞭なる事實なり乃ちその實際社會より離れて純然たる抽象的思辨を用ふること多きに
至りしも此時なり其單に日用切實の學なるに止らず天地の本体鬼神幽冥の玄理人性の秘奧に論及せ
しも此時なり道統の名目起りてその歴史的發達を明にしたるも此時なりされど吾人は此等の大變化
を思想學問の土に與ひたりし所以を以て周子の通書四十篇とせしよりも寧ろ一小品二百有八字の太
極圖說にありと云はんと欲す又之れ偉大の傑作なるかな蓋し濂溪の出てしは宋代の衰運漸く著しく
内治外交共に紊亂して國家の危殆殆んと積薪の上に座するが如し然るに高節有道の士人濂溪が其見
聞する所往々自家胸中の發憤を増さるるなし適自家抱懷の大思想を曝露して自ら慰藉を求めんとす
之れ乃ち此の不朽の大字となる之れかの孔子が周道既に衰ひて乱臣賊子其隙を繼ぎし時に當りて
先王の古典遺文を刪述し以て自ら暫く心をやりしと相全し又以て英雄の心事吾人敬慕することなし
とせんや

夫れ周子の（太極圖說及通書に散見すへき）太極論は具體的一元論にしてしかも内含的・二元論なるこ
とを云へり而して今宋代哲學の組織を見るに皆此の内含的・二元論を説明せんとして相對的・二元論に
止りしなり乃ち明道曰く天地萬物之理無獨必有對と彼等は太極を立つる共に太極分れて兩儀となる
ことを論し敢て太極そのものが直ちに或は陰となり或は陽となることを云はざるなり朱子の如きは
此の二元論を巧みて應用せんと欲しその純正哲學を始として倫理心理及鬼神に至るまで盡く對あり
て獨なきことを論するに至れり是の故に其極遂に兩儀の干係の不明を生じ往々かの理論中撞着を生
せしむるに至れり是れ實に宋學の長所にして又短所あり而して宋儒の研究法は之を前代に比するに

大に整齊にして統紀あるを覺ゆ彼等は一方に於て太極論を唱へ他方に於て格物究理を重せり之れ全く周子その人に依て其端を開きしこと炳焉なり乃ち常に彼れ等は綜合分拆兩つながら之を兼用せりされと朱子に至りては寧ろ分拆に偏して綜合を輕し歸納法を取りて演繹法を取らざるものと云ふ可し今太極圖説が宋代儒學思想の發端として之をして宋代以前の儒學に對して如何なる異彩を發たしめたるやを見んに

第一、宋代以前の儒教哲學は専ら有の一邊に偏したりしか今や老佛の學を參照して之れに加ふるに無を以てし無極而太極と唱へたり乃ち有にして有ならず無にして無ならず有無畢竟にして一にして二にして一なりと説けり

第二、宋儒は又實體と現象とを區別せり理氣体用則之れなり彼等は氣を以て形而下となし理を以て形而上となす一は變化して差別ある現象なりと雖とも他は平等にして不變なる實體なり吾人の耳目に觸るゝ所のものは只其氣の變化消長に過ぎず其理に至りてや心意の之れに達するあるのみと蓋し宋儒は吾人の知識を以て事物の本体を極むるに足る者となす是を以て萬物の本体を斷言して理となす

第三、宋儒は大にその攻究点を自己の心上に向けたり、以前の教儒は大低皆外界よりして原理を探究せんと欲したりと雖とも宋儒に至りては其方法を轉して内界より着手して以て外界に及ぼしたり、之れ歐洲中世の哲學がデカルトの自我研究より新思想新研究法の興起せると全様なり

されば則ち宋儒は其本体論に於てその觀察點に於てその攻究法に於て盡く進歩し又昔日の儒教哲學にあらずと雖ども之を以て直に老佛のそれと撰ふなしとするは當時の事狀に暗く歴史的事實を知らざるに座するなり一言一句の少しく玄奥に渉るものあれば、忽ち捕ひて之を老佛の書中より取れるものとなす、適々以て儒者の無智淺薄を現はすものなり、夫れ老莊釋氏の考察したることが、必しも儒學者の考察し能はることあらんや、否寧ろ之を綜合統一して自家思想の系統をして益豐富ならしむるは、又た思索家の務めなりと云ふ可し、況や人間の性質は大抵全一の物にして地を去る千里時を隔つる數百年、而して兩者の間に驚くべき思想の暗合の存するあるや、吾人が東西思想史に發見する所なるに於てたや、嗚呼太極圖說も亦偉書なるかを傑作なるかな吾人はその宋學朽爛の源流として尙一層明了に秩序的に歴史的に且つ批評的に研究するを欲すと云へども今その餘りに糾漫に流るゝを恐れて茲に筆を擱き又他日を期せんとす

以上吾思想配列の錯雜句章行文の難澁或は博士を困めんことを恐る只たその私見を忌憚なく陳へたるの不遜は博士の寛洪の仁慈を垂て諒せられんこと伏て希ふと爾云

(四月卅日稿)